会　報　61　　白鷹町史談会

史　　談

２０２０（Ｒ３）　　１．２７

■明けましておめでとうございます。

新たな年が始まりましたが、コロナウイルスの被害は続き、日常を取り戻すことはまだ難しいようです。このような状況ではありますが、今年もどうぞよろしくお願いいたします。ささいな制限がストレスになりますので、体調にはくれぐれもお気をつけください。（石井）

■菅原白龍の山水画と養蚕の掛軸

石井紀子

旧十王コミュニティセンターを改修して資料館にするという、白鷹町郷土資料館（仮称）の整備作業の中で、三浦文吉寄贈品の整理作業を行った。

三浦さんの寄贈品は、愛宕に作った展示室「ものずき村」に飾られていたコレクションで、有田焼などの骨董品から各地の郷土の玩具、白鷹の農耕具、羽釜などの生活用具、地元作家の美術品など 1475 点もの資料があり、その収集意欲に圧倒される。中でも目を引くのが、36 本の掛軸で、山形県や置賜になじみの深い人物の絵が多い。

南画家として有名な菅原白龍（長井市時庭出身、1833～1898）の掛軸がある。箱書の題名は「雪景山水」、雪の積もった峡谷の橋を馬に乗る人、釣り竿をもつ人が渡っている。明治５年（1872）、39 歳の時の作品。掛軸の箱に収められた便せんには、元々の所有者は貞松楼という遊女屋を開いた楼主であったこと、楼主はヤマキ消防という私設消防鋭進社を組織していたことが記されている。貞松楼は現在の荒砥琴平公園にあった遊女屋（屋号ヤマキ）のことである。

白龍の次女、玉龍（本名かねめ、1862～？）の山水図もある。玉龍の絵は絵馬がいくつか知られているが数は少ないため、この掛軸が玉龍の画風を知る資料になるのではないだろうか。他にも白龍の弟子、堀越龍湖の草花図や、湯原柳畝、石山太柏、菊池華秋と山形県で活躍した作家や新潟県の作家の軸物が収集されている。

『史談』14 号で自身のコレクションについて「山形県内の画家の作品を集めたいと思い頑張ったが、お金のない時譲るので残念ながら多くはありません。」と語っており、苦労しながら収集した様子がうかがえる。

（上）菅原玉龍

（左）菅原白龍

絵画の他に養蚕に関わる掛軸が２本あり、そのうち「蚕之一生」（明治 41 年作成）という掛軸がある。右上段から孵化した蚕の成長の様子を一齢一日、一齢二日など細かく撮影していき、五齢以降は、繭を切り取って蛹を露出させた写真や成虫の産卵の様子、精錬された糸、飼育風景の絵も掲載される。写真の間にはこの掛軸を制作した明文堂主人周防の「序文」と撮影を担った池田如水の「自序」が掲載される。「序文」によると、蚕に関する幾多の本はあるが、生育を明らかに示すものは無いことから、蚕を実大に撮影した写真を世の養蚕者と蚕の愛好者に普及させ、蚕飼育の助けにしたいと書かれ、明文堂主人の蚕の飼育への熱意がうかがえる。池田如水の「自序」では、撮影を趣味にし、

蚕の写真を一等好んでいたところ、偶々明文堂主人周防氏が訪ね来たことから掛軸の作成につながったと、制作の経緯が紹介されている。

明文堂は写真をふんだんに使いながら近代農業技術を全国に伝える出版社であり、「蚕之一生」も近代的な視点で作られた資料だと『日本の護符文化』の中で紹介されている。ただし、全てが近代的ではなく、掛軸の最上段中央に桑の葉をもつ女神が描かれること、また周防の序文に掛軸を床の間に飾るように求めることからも、講の本尊を床の間に飾るように農村家庭の中に入り込んでいく装いがなされているという。

「蚕之一生」は蚕の飼育技術の学習についてしめす資料になるが、白鷹町で実際に活用されていたのか、あるいは三浦さんがコレクションとして購入してきたのかは不明だ。今後調査を行いたい。

■「半唐箕（はんとうみ）」のこと

守谷英一

石井さんに引き続き、民具作業でわかったことです。

唐箕（とうみ）という農具があります。それは、臼などで籾殻をはずしたあと、風力を起こして穀物を 籾殻・玄米・塵などに選別するための農具です。

写真 1　唐箕（白鷹町教育委員会蔵　台帳番号 2E-0124 サイズ 620×1600×1245）

白鷹町教育委員会所蔵のものとして、旧中山小学校体育館には 5 台の唐箕が収蔵されています。民具台帳には 6 台あることになっているのですが、1 台は所在確認ができなくて、現在確認できているものが 5 台ということになります。その 5 台のうち 4 台が「半唐箕」という一般的な唐箕よりも小型の珍しいものであることがわかりましたので報告します。

その特徴は大きさだけでなく、選別された玄米などがどこから取り出されるかという構造にあります。「本」唐箕は選別された玄米が側面などに設けられた樋から出てくるようになっていますが、半唐箕はその樋がなく、選別された穀物はそのまま真下に落下するようになっています。そのために選別は粗く、何度も唐箕を通さなければならなかったといいます。またこの半唐箕は会津で作られ、現在存在が確認されているのは会津と米沢だけというものです（佐々木長生 1980「会津地方における脱穀・調整用具」『紀年銘（年号のある）民具・農具調査―東日本―』日本常民文化研究所調査報告第 6 集 p102-106）。

私は唐箕のことに詳しくなくて、整理作業の時にはそれほど注意を払っていなかったのですが、昨年、11 月 18 日に元福島県立博物館にお勤めだった佐々木長生（たけお）さんに「半唐箕」のことを伺い、その後の民具整理作業のと

きに確認したら５台のうち４台が半唐箕であると思われたのです。

早速、佐々木さんに写真を送り見てもらいました。そうすると、現在、福島県以外で半唐箕として知られているものは、米沢の農村文化研究所の置賜民俗資料館に所蔵されている「天保８年（1837）」に福島県河沼郡湯川村の北田集落の北田久内が作成したものが唯一で、それ以外に見つかっていない、新発見だと教えていただきました。

白鷹町収蔵の半唐箕のうち、年代のはっきりしていて、古いものからならべてみると次のようになります。

写真 2　半唐箕（白鷹町教育委員会蔵　台帳番号 2E-0125 サイズ 750×1130×1280）

写真２の唐箕には、年号の他に、丸い胴の覆いの板に「「□□□□　文久元　□□□□　五十川村□□□」、側板に横板「唐箕細工所　小出　日向屋清五郎請合」と記されていて、長井の日向屋で作られたことがわかります。

写真３は「大工　佐藤□次　明治廿三年　十月吉日　西置賜郡白鷹村　大字十王　海老名長九郎」と墨書されていて、史談会会員の海老名慎一郎さん（十王）が寄贈してくださったものです。その墨書から「大工　佐藤□次」さんが作ったものを明治23年（1890）に購入したと判断されます。

写真 3　半唐箕（白鷹町教育委員会蔵　台帳番号 2E-0122 サイズ 585×1205×1280）

写真４は、東根の紺野梧郎さんが寄贈されたもので、年代はわからないのですが、製造者が記されているものです。「唐箕細工所　小出　日向屋　清五郎請負」と記されています。

写真 4　半唐箕（白鷹町教育委員会蔵　台帳番号 2E-0120 サイズ 570×1190×1262）

また写真５は、東根の鈴木文三さんが寄贈されたもので、「唐箕細工所　浅立　足利屋□□□□請合」と記されています。

これらのことから、白鷹町や長井市には唐箕の製作所があって、古くは文久年間から唐箕が作られていたことがわかります。また、その唐箕制作技術は、これまで唯一の「半唐箕製作地」とされていた福島県会津地方と何らかの関係を持っているのではないかと推測されます。

写真 5　半唐箕（白鷹町教育委員会蔵　台帳番号 2E-0121 サイズ 565×1185×1240）

最後に所在が確認できなかったものを紹介します。写真 6 は竹田惣兵衛さんが寄贈してくださったもので、「唐箕製造所　宮　明治 27 年 8 月」と墨書があることが台帳に記載されていたのですが、実物が見つからず、確認できませんでした。

写真 6　半唐箕（白鷹町教育委員会蔵　台帳番号 2E-0123 サイズ 580×1176×1230）

さらに図録を調べていたら長井市西根の西根郷土資料館に半唐箕があることがわかりました。さっそく訪問して確認しましたところ、「草岡高橋久兵衛持　明治廿八年秋」、「唐箕細工所小出　日野屋□一郎請合」という墨書がありました。これで、長井には先の「小出　日向屋清五郎」以外にも「半唐箕」の制作をしていた「細工所」があったことが確実にいえます。なお、「日野屋」は「東講商人鑑」には茶いさば（魚偏に「集」の字）問屋として「日野屋与四郎」というのが記載されています。この「日野屋」との関係がありそうです。今後の課題になりそうです。

写真 7　半唐箕（長井市西根公民館　西根郷土資料館蔵）

このように、調査が進むとこの地域での「半唐箕」が作られていた可能性が拡大しそうです。それが大きな発見だと佐々木長生さんに教えていただきました。今後もう少し勉強してみようと考えています。

みなさんの中で情報をお持ちでしたら教えて下さい。

■お知らせ

教育委員会からお知らせします。瑞龍院内にある龍門文庫の本が写真展示されます。龍門文庫の一部は、上杉家がかつて所蔵していた本（林泉文庫）であり、貴重書がそろっていることがわかっていました。この林泉文庫についてさらに調査を進めた展示になります。ぜひご覧ください。（石井）

「林泉文庫の世界展～伊佐早謙がつないだ沖縄と米沢～」

■期間　令和 3 年 2 月 27 日（土）～3 月 14 日（日）　午前 10 時～午後 5 時

■場所　ナセBA 1 階　よねざわ市民ギャラリー第 8・9 展示室　米沢市中央 1-10

■入場無料